令和3年1・2月号（281号）
（皇紀2681年）　毎月1日発行

新風

編集人　瀬戸　開
発行人　魚谷哲央
年間購読料＝2,000円

維新政党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700　FAX.075-708-3800
https://shimpu.jpn.org/
otayori@shimpu.jpn.org

「まつりごと」の原像と国難克服の基点

東京大学名誉教授
小堀桂一郎

我が国の「まつり」＝祭祀の起源を一般に披見可能の文献の上に問ふとならば、『日本書紀』神代の下の巻にそれが見えてゐる。天つ神なる高皇産霊尊が、今日香取・鹿島の祭神として知られる経津主神・武甕槌神を斎主に立て、出雲の大己貴神に対する戦勝を祈らせた旨の記事があり、直ぐそれに続けてこの東国の両神に帰服した大己貴は地上の行政・統治権を天つ神の系統に譲り、自分は幽事を治める、即ち祭祀に専念する、と納得した話である。そこで高皇産霊尊は天津神籬と天津磐境を起し樹て、これを斎の場とし、皇孫の守護のために大己貴神＝大物主神をそこに居らしめ、天つ神の眷族をして斎はしめた、とある。この話を、日本人が神を祀り神社を創建する業の起源であると読む事が文献の上では可能である。

ところが改めて説くまでもない事だが、平成四年の青森県三内丸山遺跡の大発掘開始によつて発見された、六本柱の大建造物に象徴される縄文時代の文化遺産の再認識を機会に、所謂先史時代の国土住民の精神生活についての考証に新しい展望が開けた。

祖霊信仰と精霊祭祀

遺跡の原状の確認とその図上での再現までは考古学の領分であるが、遺跡の構造が持つ意味の解読と評価は歴史学の責任に属する。輓近の縄文遺跡の構造を解釈する作業で最も信頼すべき業績を世に問うてゐる田中英道氏の説に拠れば、三内丸山遺跡の示す村落の構造は、住居と墓地とが近接共存する配置から見て、この村の住民が既に祖霊崇拝の習俗を有してゐた証跡であり、六本の巨大な柱の構造物は、謂つてみれば神社の原像と見做すべきものである、と云ふ。

田中氏の説には十分な説得力がある。してみれば、日本列島の住民は縄文時代前期、即ち約七千年前から六千年前にかけてとされる悠遠の昔に既に祖霊信仰といふ宗教を持ち、壮大な神殿を村落共同体の中心部に築き、当然ながらそこで営まれる「まつり」を以て住民の精神生活の統合を果してゐた事になる。

祖霊信仰は、日本の国土創成神話が発生し、住民の記憶の中で形象を成し始めたと考へられる段階、即ち大陸の漢帝国の政治的圧力が日本列島住民の国家形成への刺激として及び始めた頃には、大きく分けて公と個の二つの次元から成る一箇の体系を成すに至つてゐた。前者は国家共同体の守護霊としての天つ神への畏敬の念であり、後者は諸々の自然現象を惹き起す国つ神としての精霊達への畏怖と親近との同時併存感情である。

日本列島の住民は、四季が規則正しく循環し、その季節毎の太陽の出没の位置、それと連繋し且つ並立するが如き月の盈虚、昼夜の長短、寒暑の交替等に、天地を支配する秩序の存在を感じ取り、この秩序を維持する眼に見えぬ意志への深い畏敬の念を懐いた。その不可視の意志を天つ神と捉へ、その神を祀る権威を有する長老格の存在を共同体の統治者として奉ずる事を積年の経験から生の知恵として身に着けた。

他方、農・林・漁・猟といつた形での現実の生業を営む際に接触する諸々の自然現象の背後にも、それを人間に恵みをもたらす様に動かしてゐる穀霊その他の精霊の働きを看て取り、霊達との友好関係を保つ事に努め、村落毎のささやかな形での精霊の祭祀を営んでゐた。

祭祀の司としての天皇

かうした精神風土が列島全土の大きな部分を掩ふまでに成熟した頃合を見て、各地に簇生してゐた部族乃至村落共同体を大規模に統合する形で神武天皇が畿内の橿原の地に即位され、日本といふ国家共同体が成立した。人々は天皇を新たに成立したこの共同体の昔ながらの守護霊の祭祀の司と見、自分達の個々のまつりの様式の範型をそこに仰ぎ見た。斯くして祭を共有する形での君と民との関係が成熟する条件は整つた。

祭祀の司としての代々の天皇の朝廷は、国土住民の集合意志である暗黙の期待に着実に応へた。初代以来の歴代の天皇、例へば第十代崇神天皇が三輪山の大物主神の託宣を受け、民間からその神の苗裔を見出してその祖神を祀らしめ、以て疫病の猖獗を鎮め得た事蹟に見る如く、朝廷による共同体の守護霊への尊崇が国土住民の安寧の保証となつた。

祭政一致の国体への回顧から

斯うしてみれば、我が国の祭政一致の国体は、日本といふ国家が建設されるより遥か以前、約七千年昔の縄文時代の文化の段階で育成されてゐた住民の精神生活の様式が形象化したものである。この形象が国として定まつて以来二千年、国土の住民は様々の歴史上の難関・危機を経験して来たが、その度毎に自分達の精神文化の原像を想起し、其処に回帰する事でそれを克服して来た。

国民の祭祀文化の司としての天皇による皇祖霊への畏敬の下に国民が結集する、その団結の力を以てしての国難の克服である。今日現在国民が直面してゐる国難への対処に際して、まつりごとに携る人々は、先づかかる悠久の歴史への畏敬を籠めての回顧から出発してもらひたい。国の守護霊は必ずや君民の祈願に応へてくれるであらう。

新風驟雨

▼令和の御代替りに関しての皇室諸儀式が問題点を孕みながらも昨年滞りなく斎行されたが、それと並行して武漢ウイルス禍拡散に翻弄された令和二年であつた。▼令和三年の新年を迎へても菅政権の対応策が後手に廻つてゐるとの批判で内閣支持率も落ち込んでゐるが、後手に廻つてゐると言ふよりもこの疫災一年の学習能力が欠けてをり、対策の逐次投入といふわが国政治の悪しき体質が改めて露見したのが実情である。▼過剰な恐怖心を前提として進行して来た政治判断を今改めて白紙から再考すべき時ではないか。この一年間の様々な医学的異見を検討の俎上に上げ直し、専門家会議や医師会が言ふ医療崩壊の根本要因を分析し直して整合的な対策を講ずる方向への転換を模索しなければならない。自殺者が増加し、中小零細企業の倒産・廃業が増大してゐる現状から日本のくらしを守るため、罰則ではなく効果的な支援策が大局的に講じられねばならない時機である。▼武漢ウイルス禍のパンデミックに加へてアメリカの政権移譲の混乱の中で、中共の世界謀略戦略が着々と進行してゐる。国際情勢の波乱の中でわが国もこのままでは沈没しかねない令和時代の本格的幕開けである。（谷）

本紙目次

一頁…
●「まつりごと」の原像と国難克服の基点
二頁…
●令和三年活動基本方針　他